

目指したい。また従来から主要テーマとしているプラトンの「対話篇」構造の特質と意味の研究も、当該研究課題と深く呼应するものであり、これを継続することも主たる作業の一つとしていきたい。

以上のような計画から、研究経費は主として文献の調査と収集に当てられる。

---

## B01 仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容

研究代表者 江島 恵教  
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 佐古 年穂  
駿河台大学現代文化学部 助教授  
丘山 新  
東京大学東洋文化研究所 教授

### 研究目的

江島① 1) 既に作成されている『大毘婆沙論』のテキストデータベースを利用し、固有名詞・経典引用等をマークアップする方法を検討し、確立する。

2) その入力作業とデータ整理。

② テキストデータベース、そのユーティリティーを開発し、かつ文献のテキスト自体と、伝承・受容の過程を明らかにしようとする点に、研究上の特色がある。

③ 国内国外においては、まだ『大毘婆沙論』についての厳密な文献批判的研究は遂行されていない。

佐古① 1) 『俱舍論』第4章業品の写本に基づくサンスクリット・テキストの校訂・発表。

2) P.Pradhan校訂の『俱舍論』と、Sthiramatiの註釈・Purnavardhanaの註釈とのConcordanceの作成。

3) 業品部分の衆賢の『順正理論』との対応表を含む形で、Sthiramatiの註釈の研究。

②③ 1) 既存のテキストにおいては参照されていない両漢訳、チベット訳、各種註釈を参照してより正確なテキストの作成を期す。

2) これまで発表されていないConcordanceを発表することにより、両注釈書の利用の便を図る。

3) これまで厳密になされていない二つの註釈の対照により、両書のより深い理解の材料を提供する。

丘山① 『維摩詰経』や浄土経典類を採り上げ、それらの経典が中国でなぜ受容され歓迎されたのか、またその時代的背景を明らかにする。それにより、その経

典編纂時における趣旨とのずれも対比的に明かされるであろう。

② 本研究は、中国文化という大きな枠組みの中で仏教の果たした役割を明らかにするという従来にはない特色と独創的な点を持つ。この研究により、中国文化の中で仏教が果たした役割の一端が新たに明らかにされる。このことにより、従来は個別研究になっていた中国仏教と中国思想・中国文学とが共通の接点を持つようになる。

③ インドで誕生した仏教思想が中国や朝鮮・日本で受容され、変容したかを明確にしようという本研究は、その独自性ととも、東アジア諸地域における文化の受容と交流という大きな課題のなかでも重要な一翼を担うものである。

### 研究計画・方法

平成11年度 現在『大正新修大蔵経』テキストデータベース(SAT)他のインターネットの利用、当該研究に必要なテキストデータベースの作成・利用、サンスクリット、チベット語用のDiacriticを含む特殊なフォント並びに漢字が混在した複雑なレイアウト等、コンピュータの利用は不可欠であり、各自用途に応じたコンピュータを購入する。その上で、江島は『大毘婆沙論』、佐古は『俱舍論』並びにその註釈書、丘山は『維摩詰経』の研究において必要なデータの入力・整理を開始する。

平成12年以降 各自データの整理・統合をおこない、江島は『大毘婆沙論』の固有名詞、経典の引用に関する調査の結果をテキストデータベースに統合し、佐古は『俱舍論』業品テキストの校訂並びに『俱舍論』註釈書の研究、丘山は『維摩詰経』並びに浄土経典類に関する研究を完成させる。

各自の研究を相互に点検し合い、特に共通的な方法論を確立し、仏教思想のインド・中国ないし日本における伝承と受容についての研究の総合化を図る。

---

## B01 ギリシャ・ローマ文献の形成・伝承・受容史の研究

研究代表者 中務 哲郎  
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 エリザベト・クレイク  
京都大学大学院文学研究科 教授

南川 高志  
京都大学大学院文学研究科 教授

### 研究目的

(1) 本研究は、「ヒポクラテス集成」、史書群「ヒスト

リア・アウグスタ」, イソップを初めとする寓話文学, を主な研究対象として, 古代ギリシア・ローマの文献の形成と伝承および受容の歴史を, 哲学(または科学史・史学・文学の分野にわたって具体的に跡づけ究明することを目的とする。

(2) この三つの作品群はギリシア・ラテン文学研究からは従来不当に軽視されてきたが, 作品形成には先行文学・思想から多彩な影響が及んでいること, 長い伝承と受容の歴史をもつことなどから, 古典の継承の意義を考察する格好の素材である。

(3) 従来軽視されてきた作品群を扱うだけに, 西欧の価値観を通してきた古典受容のあり方にも反省を迫る成果が得られることが期待される。

#### 研究計画・方法

本研究への参加者は本研究と密接に関連したテーマで科学研究費の交付を受け, 資料収集にとりかかっているため, 引き続き資料の充実に努める。特にヒポクラテス関係資料の収集のためには, J. Jouanna氏(Sorbonne, Paris)やWellcome Institute(London)の協力も仰ぐ予定である。クレイクは, 体液理論に関わる用語の分析を手がかりに, 「ヒポクラテス集成」の作品相互の関係を検討し, 国際ヒポクラテス学会(ニース, 10月)で発表を行う。南川は, 「ヒストリア・アウグスタ」の諸版を元にテキストを確定する作業を進める。中務は, イソップに代表されるギリシアの寓話のオリエント・エジプトからの影響, 他の文学ジャンルとの交渉を考察する。

---

### B01 ユースティニアヌス帝「学説彙纂」研究 元首政期法学著作の伝承と変容

研究代表者 西村 重雄  
九州大学法学部 教授

研究分担者 児玉 寛  
九州大学法学部 教授

#### 研究目的

1) 本研究は, 元首政期法学著作が3世紀後のユースティニアヌス帝「学説彙纂」に収録された際に受けた受容, および, ビザンツ期, 西欧中世, 近世ローマ法学およびパンデクテン法学が蒙った理解の変更を明らかにすることを目的とする。

2) パンデクテン法学の強い影響にある従来の古典期ローマ法学とは異なる弾力的, 試行錯誤の中で生成する姿を示し, 現代法思考の反省の契機を作ることが予想しうる。

3) 欧州の学界でも目指されてはいるが未だ十分には達せられておらず, ローマ法的伝統の軽いアジアの視点が重要である。

4) 2つの総合(A)の科学研究(「バリシカ法典」「ローマ法の日本民法への影響」)および2つのローマ法・民法国際シンポジウム(1991・1998)の組織・開催を経て準備・企画した。

#### 研究計画・方法

関連文献の一層の収集, 重要写体の入手分析を行うと同時に, 法資料の厳密・正確な理解を共同分担者(児玉教授)と精力的に行う。この成果を国内のローマ法研究会に掲示すると共にドウ・ヴィシャー古代法史協会(S. I. H. D. A)国際会議において逐次報告し批判を仰ぐ。

---

### B01 ビザンツ帝国と古典継承・創造活動 マケドニア朝期の古典再生とその歴史的意義

研究代表者 大月 康弘  
一橋大学大学院経済学研究科 助教授

#### 研究目的

10~12世紀のビザンツ帝国は, 同帝国のルネサンス期とされ, 多くのギリシア古典の再生・創造活動が見られた。本研究は, 現代ビザンツ古典学の成果を批判的に摂取しつつ, 当該期におけるビザンツ古典の成立・伝承の実態を総覧・研究する。その際, 政治・経済・社会活動に関わる古典を中心的考察対象とし, (1) 古典史料の網羅的収集と分析(写本解題, 批判的校訂, 翻訳等), また, (2) 古典の社会的成立基盤についての考察, を中心的作業とする。

本研究の代表者は, これまでの古典研究の経験の上に立ち, ビザンツ文明固有の価値理念体系を客観的に記述する視座の確保に務める。本研究は, かかる作業を諸古典学との連携の中で行うことで, 「古典の伝承と受容」という共通研究項目における比較考察に有意を寄与することを目標とする。また, 古典の総覧と個別分析を通じて, ビザンツ(=中世ギリシア)古典の新たな方法論的視座の開発を目指したい。それは, 西洋文明理解の一層の深化に寄与し, 新たな古典学方法論の開発にも貢献しうる作業であると考ええる。

#### 研究計画・方法

本研究の初年度となる平成11年度には, 研究概要・手順の策定を行い, また本計画研究のための物的基礎の確保に務める。すなわち, (1) ビザンツ古典資料の収集を行い, 関連基礎コレクションを有する一橋大学付属

図書館に付置する（平成12年度以降も同様）。（2）研究協力体制を整備し、外国の研究機関・研究者からも協力・情報提供を求める。（3）ビザンツ古典（写本、批判的校訂本）のサーヴェイを行い、欧米における既存のビザンツ古典分析法を批判的に再検討しつつ、各古典史料についての解題の作成に着手する。（4）重要度の高い古典については、個別分析（写本状況、成立の背景、内容分析等）を開始する。（5）分析・研究作業の成果は、本特定領域研究のメディア等を通じて随時公表する。また、コンピュータ利用による情報の整備方法についても、他の計画研究代表者との連携の中で検討する。

---

## B02 中世における外国文化の受容と展開

研究代表者 木田 章義  
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 鈴木 広光  
九州大学文学部 講師

### 研究目的

本研究では、中世のキリシタン資料、朝鮮資料、中国資料を扱う。これらの文献がどのような背景と歴史的経緯の中で編纂されているのか、どういう性格の文献であるのか、編纂の意図は何であるのか、そしてその内容はどのようなもので、どのような態度で翻訳、もしくは編纂されているのか、などという点を明らかにし、同時にそこで用いられた日本語の問題も検討してゆく。つまり本研究では、これらの資料群をどの分野でも正しく利用できるように、文献学的な総合的、且つ、基礎的研究を行う予定である。

具体的には、朝鮮資料は、李氏朝鮮で編纂された文献を中心に、試訳館での和学の位置や苗代川資料も含めて、分析してゆき、中国資料は、倭寇の猖獗によって、日本研究が盛んになった結果、編纂された日本研究書を中心に据える。キリシタン資料についても、膨大な資料群があり、これら全体を対象にすることは不可能なので、重要でありながら、ほとんど研究されていない「パレト写本」を中心にして、ドチリナや辞書など、関連する所を、有機的に結びつけつつ、研究を進めて行く予定である。これらの基礎的な研究のあと、文献そのものの読解を進めて行き、より深い内容把握を目指す。特にそこに用いられた日本語の性格、特色などに注目して行く予定である。

### 研究計画・方法

朝鮮資料は『捷解新語』『方言集釈』を中心として、

朝鮮資料の背景、李氏朝鮮の試訳院の中での和学の位置、日朝関係の実態、文禄の役で日本に拉致された朝鮮人の問題、苗代川に残る朝鮮資料の検討などそれぞれのテーマについての文献のリストを作る。

中国資料では『日本一鑑』『日本考略』を中心にして、中国資料の背景、明、清時代の倭寇の現状、中国南方の海防政策と中央官僚の意識の問題、南方商人たちの日本との交易の実態などについての文献リストを作る。

キリシタン資料では、「パレト写本」を中心にしてキリシタン資料の背景、イエズス会の講義の内容や構成、宣教師の日本語の水準とその編纂物、宣教師のローマに送った書簡、イエズス会の宣教方針、禁令後のイエズス会の活動などについての文献リストを作る。同時に、「パレト写本」の翻訳原典となった聖書の探索も行う。

これらの文献については、パソコンに入力して基本データを作成し、公開する。

---

## B02 キリシタン文献の文化横断的研究

研究代表者 米井 力也  
大阪外国語大学外国語学部 助教授

研究分担者 エンゲルベルト・ヨリッセン  
京都大学総合人間学部 助教授

### 研究目的

キリシタン文献には、日本文化がはじめて西洋文化と接触したときに生じた軋轢や融合の様相がはっきりと刻印されている。その点で、聖書や聖人伝に代表される西洋の古典の日本における伝承と受容の典型と考えられる。しかし、キリシタン文献の分析のためにはラテン語・ポルトガル語・スペイン語等で記された原典との対照が不可欠であるため、研究があまり進んでいないのが現状である。

本研究では、日本における西洋の古典の伝承と受容の一環としてのキリシタン文献を、言語・文化・歴史の横断的な視座から総合的に分析することを主眼とする。キリシタン文献ならびにその原典の収集と対照、ヨーロッパ人宣教師や日本人キリシタンが直面した異文化間の軋轢等の実証的分析、大航海時代のヨーロッパと日本の歴史的な位置、江戸幕府の迫害によって潜伏せざるを得なかったキリシタンによるキリシタン文献の変容など多角的に研究する。また、同時に、従来一部の研究者しか触れることのできなかったキリシタン文献をデータベース化することによって、研究を深めるための基礎とする。

### 研究計画・方法